

現代方言に残存する《醒世姻緣傳》の中の軽声語 (2)

Light Tone Words of 《*Xingshi Yinyuan Zhuan*》
Remaining in Modern Dialect Chinese [part II]

植 田 均
Ueda, Hitoshi

[提要]

西周生著成书于明末清初, 是用当时的北方话来写的。它又是方言词汇很丰富的一本小说。这些方言词汇, 有的现在已经消失, 有的至今仍使用。本文试图哪些轻声词在现代方言里继承下来。

0. 前言

1. 一音節で轻声の語

2. 二音節で轻声の語

3. 「一定の範囲内を示す“裏”を伴う語、重ね型、接尾辞を伴う語」以外の轻声語

3.1. A~De (以上、別号)

3.2. Deng~Z (以下、本号)

4. 一定の範囲内を示す“裏”を伴う語

5. 重ね型の名詞、一部の動詞、複合形容詞の重ね型

6. 方向動詞

7. 接尾辞を伴う語

- deng

跣蹬 cǐdeng

積義：「〔動詞〕踏みつける、踏みにじる」。現代共通語では一般に“踏；睬”。

《現漢》、《古今》、《漢語》、《補》いずれにも未収。

方言辞典類では《漢方常》、《現代北京》、《山東》など多くに未収。

《漢方大》(p.6543)に“跣蹬”（積義“踏；睬”）の方言点を冀魯官話（山東省淄博）とする。

《現漢方大》(p.4824)に“跣蹬”は未収。

近世語辞典類では《近漢》、《百部小説》に“跣蹬”を収める。但し、“V蹬”の“蹬”は動詞に付接する接尾辞で、“鄧；騰”とも作る。これは、前掲の“V搭”形式と同一構造を形成する。例えば、《老論》は“V蹬”の類の語群を《醒》より次の如く挙げる。

踢蹬（第59回）；跳蹬（第55回）；跣蹬（第68回）；刁蹬（第67回）；豁鄧（第48回）；折騰（第46回）；鋪騰（第4回）

したがって、“蹬”が接尾辞であるならば“跣蹬”の意義は中心語“跣”だけにある。“跣蹬”は多くの辞典類に未収であったが、単音節語“跣”（積義“睬”）は逆に多くの辞典に収録する。

“跣”は、《現漢》、《古今》、《漢語》、《補》に一般語彙で収録。《拼音词汇》に未収。

方言辞典類では《山東》に“跣”（積義“踏（着某种物体）”）の省内方言点を棗莊、臨沂、平邑、濱州、陽谷、曹県、寿光とする。《关中方言》にも単音節語“跣”（積義“睬；踏”）を収める。《漢方常》は“跣”を同様の意義で北京方言とし、文康《儿女英雄傳》より挙例（但し、《北京話》、《現代北京》に未収）。《古方言》(p.48)は“跣”について、“踏”の意味になるものの、用法がやや異なる（“今俗语犹谓蹋曰跣矣”。按：或谓跣“俗读睬”。想系依《广韵·上纸》“跣，踏也。又阻买切”。然就口语验之，“跣”仍多读cǐ。“跣”如“睬”在方言中是有分别的。我们能说“当心睬坏了庄稼”，但一般不说“当心跣坏了庄稼”）。『山東方言の調査と研究』(p.105)に“跣”（積義“踏；睬”）を“今见于鲁西、鲁南”とする。《金瓶梅詞典》、《紅樓夢語言詞典》に“跣”のみ収録（積義“睬；踏”）。いずれにしても《金瓶梅詞話》、《石頭記》、《儿女英雄傳》に“跣蹬”は未収。

《醒》では同義語“睬”、“踏”の他に“跣蹬”も用いる。“跣蹬”の例。

有的吊了丁香，叫人沿地找尋；有的忘了梳匣，叫人回家去取，跣蹬的塵土扛天，臊氣滿地。(68.13b.5)

（ある者は耳飾りを落とし、人に沿路ずっと捜させ、ある者は髪結い道具をしまっておく小箱を忘れ、人に家へ戻って取って来てくれという。この結果、ぞろぞろ大地を踏みしめた砂塵は天にまで上り、生臭い気が一面に充満しています）

刁蹬 diāodeng

積義：「〔動詞〕難癖をつける、嫌がらせをする」。現代共通語では一般に“刁難；使为难”。

《現漢》、《古今》、《漢語》、《補》いずれにも未収。《拼音词汇》に未収。

方言辞典類では《河北方言》の詞目“刁難”の項に“刁蹬”を収め、“一般指小孩耍赖刁难大人”と積義する。

《現代北京》の同音語“刁登”〔diāodeng〕は積義（“翻供使审判者为难”）がやや異なる。

《山東》、《北京話》、《漢方常》に未収。

《漢方大》(p.147)は積義“刁難；为难；欺弄”の方言点を単に官話、閩語（広東省汕頭）とする。この他に積義“尖刻；刻薄”も収める。

《現漢方大》(p.140)に同音語“刁登”を収録するも積義“刁難;使爲難”は未収。なお、足偏の“刁蹬”は立項しない。

近世語辞典類では《近漢》、《百部小説》に収める。《方言俗語》(p.35)は“刁蹬”を“(1)刁難,使爲難。(2)故意使別人麻煩”と積義し、(1)の意義で《醒》より挙例。また、(2)の意義は現代徐州方言に継承されているという。但し、同一著者李申《徐州方言志》に“刁蹬”は未収。この(1)、(2)の二者は同じような意義を示す。“刁蹬”について、《古方言》は幾つかの異体字を挙げる。即ち、“刁蹬”(金・董解元《西廂記諸宮調》卷五)、“刁蹬”(同前)、“刁蹬”(元・无名氏《陳州糶米》一折、《醒世恒言》卷十八)等である。《金瓶梅詞典》に“刁蹬”(積義“刁難;折騰”)を収録。

《例釋》、《石頭記》、《兒女英雄傳》に未収。

《醒》では同義語“爲難”、“刁難”も用いるが、“刁蹬”も用いる。その例。

覓漢把自已那怎樣央他,與他那要銀子立文書怎樣刁蹬的情節,一一說了。(67.1b.3) (“自已”=“自己”)

(作男は、自分がどのようにその人に頼んだか、また、その人が銀子を受け取る契約文書を作成するのにどのように難癖をつけられたかという有様をいちいち述べた)

《金瓶梅詞話》からの例。

偏這淫婦會兩番三次刁蹬老眼。(《金瓶》91.13a.5)

(よりによって、このすべたは二度三度とこの私に難癖をつけやがる)

豁鄧 huōdēng

積義:「〔動詞〕かき乱す、迷惑をかける、邪魔をする」。現代共通語では一般に“攪和;攪擾”。

《現漢》、《古今》、《漢語》、《補》に未収。《拼音词汇》に未収。

方言辞典類では《山東》に近似音語“豁撓”(積義“搗乱;攪擾”)の方言点を桓台、青州とする。

《漢方常》、《現代北京》、《河北方言》、《現漢方大》(p.5975)に“豁鄧”は未収。

《漢方大》(p.7371)に“豁鄧”(積義“攪和”)を《醒》第48回より挙例。

近世語辞典類では《例釋》に“豁鄧”(積義“攪和”)を《醒》第48回より挙例。《百部小説》にも収録。

《方言俗語》、《古方言》、《金瓶梅詞話》、《石頭記》、《兒女英雄傳》に未収。

《醒》では同義語“攪擾”、“敗壞”がよく用いられる。時に“豁鄧”も用いられる。黄肅秋注に積義“攪擾、揮撒、敗坏”とする。その例。

龍氏…罵說:“…。我拋你家米,撒你家的麩,我要不豁鄧的你七零八落的,我也不是龍家的丫頭。”(48.11b.4)

(龍氏は…罵って「…。わたしゃ家の米をほっぽり捨て、麩をばらまき、家の中の物をかき乱し、滅茶苦茶にしてやる。それでなくっちゃ、わたしゃ龍家の娘ではないよ!」と言った)

作蹬 zuòdēng (作登)

積義:「〔動詞〕踏みにじる、痛めつける、しいたげる、いじめる、けなす」。現代共通語では一般に“折騰;糟蹋;鬧騰”。

《現漢》、《古今》、《漢語》、《補》いずれにも未収。《拼音词汇》に未収。

方言辞典類では《山东》に“作登”（積義“(1) 糟蹋; 损坏。(2) (小孩) 捣乱; 玩皮”)と作り、軽声語で収録。
《北京方言》、《北京话》、《现代北京》《河北方言》に未収。

《汉方大》(p.2736)は同音語“作登”（積義“糟蹋; 闹腾”）の方言点を冀魯官話(山東省)とし、《聊齋哩曲集・磨難曲》第18回より挙例。また、“作蹬”も《醒》第68回より挙例。

《現漢方大》(p.1826)に“作登”（積義“折騰”）の方言点を済南とする。なお、“作蹬”は未収。

近世語辞典類では、《例釋》に“作蹬”を《醒》第68回より挙例。また、《聊齋哩曲集》よりの挙例は“作登”
と作る。《古方言》に“作蹬”(作登)を積義“糟蹋; 搅乱”とする。そして、“作踐”と同じ意義だとする。

《方言俗語》、《金瓶梅詞話》、《石頭記》、《兒女英雄傳》に未収。

《醒》では同義語“作踐”(“作踐”)が優勢。時に“作蹬”も用いられる。次の例の黃肅秋注に積義“作踐; 吵闹”とする。

你就強留下他, 他也作蹬的叫你不肯安生。(68.10b.4)

(お前が無理にあれを留めれば、あれはお前を安穩と生きられないほど痛めつけるだろう)

-dian

打點 dǎdian

積義:「〔動詞〕整える、用意する」。現代共通語では一般に“准备; 收拾; 料理(礼物、行装等)”。

《現漢》(積義“收拾; 准备料理; 准备(礼物、行装等)”)、《古今》《漢語》いずれにも一般語語彙、軽声語として収録。《漢語》は“北京語音讀作[dǎdian]”とする。共通語の大枠基準を《拼音词汇》にも軽声語[dǎdian]で収録する。

方言辞典類では《汉方常》に北方方言として積義項を次の3項挙げる。

- (1) “打发”「送り出す」:評書《读黄梁》より挙例。
- (2) “准备; 收拾”「準備する、片付ける」:文康《儿女英雄传》より挙例。
- (3) “用钱财疏通, 托人照应”「(金品を贈り) 便宜を図らせる、関係をつける」:《红楼梦》より挙例。

本稿では、このうち積義(2)を取り上げる。

《北京话》にも上記意義項(2)及び(3)を収めるが、《现代北京》は上記意義項(1)~(3)全てを収める。したがって、全積義項が現代方言に継承していると言える。但し、《北京方言》の“打点”[dǎdian]は“打发”のみの積義を有し、上記積義(2)、(3)は未収。《徐州方言志》(p.148)は“打点”を“(1) 事前打招呼, 联系好。(2) 为达到某种目的给人送礼”と積義。これは、《汉方常》の意義項(3)と合致するのみである。《山东》に未収。

《汉方大》(p.1024)に積義“查点; 检视; 整治”の方言点を単なる官話とする。この他に、積義“打发”、“联系好”、“侍弄(牲口)”、“起作用”、“振作”を有する。

《現漢方大》(p.844)に“打點”の積義“送人錢財, 請求照顧”の方言点を徐州、西寧、太原、娄底、于都とする。また、積義“預先作了準備”の方言点を洛陽、積義“準備; 打算; 考慮”の方言点を温州、積義“安排”の方言点を長沙、積義“整理”の方言点を梅県とする。

近世語辞典類では、《百部小说》に積義“(1) 安顿; 料理。(2) 准备; 收拾; 整理。(3) 行贿托情。(4) 考虑”とする。このうち本稿では積義(2)が該当する。《金瓶梅词典》に積義“(1) 打通关节。(2) 收拾; 安排”とする。このうち、本稿では積義(2)が相当する。《红楼梦语言词典》に積義“(1) 收拾; 准备(礼物、衣物、银两)。(2) 振作。(3) 贿赂”とする。このうち、本稿では積義(1)が相当する。《例釋》、《方言俗語》、《古方言》に未収。

《醒》の例。いずれの例も積義 (2) “准备; 收拾; 料理 (礼物、行装等)” 「準備する」を示す。

連春元叫人送了吃用之物: 臘肉、响皮肉、…。又擬了六个經題, 六个《四書》題, 來叫學生打點。(38.4b.7)

(連春元は人に食べ物を届けさせた。塩漬け肉の干物、ブタ皮の揚げ物、…である。それに、六題の經、六つの『四書』題が用意され、学生達に試験準備させた)

誰知“對牛彈琴, 春風不入驢耳”, 口裏陽爲答應, 背後依舊打點要做滑家的新郎。(94.4a.2)

(ところが「猫に小判、馬の耳に念仏」の如く、口でははっきりと承知したと言い、裏では依然として滑家の新郎となる準備をしています)

《金瓶梅詞話》、《石頭記》、《兒女英雄傳》の例。積義はいずれも「準備する」を示す。

你在家看家, 打點些本錢, 教他搭個主管, 做些大小買賣。《金瓶》(98.2a.1)

(お前は家で家を見ていてくれ。元手を準備し、彼に番頭を使わせて僅かでも商売させるがよい)

一面打點送林之孝家的禮, …又打點送帳房的禮, 又預備幾樣菜蔬請幾位同事的人。(《石頭》52.1b.1)

(一方では林之孝のかみさんへ贈る品を用意し、…また、帳場への贈る品も用意した。そして幾つかの料理を用意し、同僚となる人を招いた)

楮大娘子道: “這些事等不到老爺子操心。連喫的帶你老人家的酒, 我臨來時候都打點妥當了。…”

(《兒女》20.2a.6)

(楮のかみさんは「そんな事は親爺さんが心配するまでもありません。食べ物や親爺さんが飲む酒までも私が出かける時に全てきちんと準備しましたよ。…」と言った)

-dong

勞動 láodong

積義: 「〔動詞〕煩わす (敬語として用いる)」。現代共通語では一般に“烦劳; 麻烦; 劳驾”。

《現漢》、《古今》、《漢語》に積義“敬辞, 烦劳”でいずれにも一般語語彙、軽声語として収録。共通語の大枠基準を示す《拼音词汇》にも“敬辞: 烦劳”と注記して収める。

方言辞典類では《汉方常》に積義“敬辞, 烦劳”で北方方言とし、《金瓶梅》、《红楼梦》より挙例。《現代北京》にも収録。《山东》、《北京话》、《河北方言》に未収。

《汉方大》(p.2470)に“劳动”(積義“劳累; 麻烦 (客套话)”)の方言点を北京官話(北京)、西南官話(四川省)とする。

《現漢方大》(p.4513)に“勞煩”(積義“客套語。煩勞, 麻煩”。方言点(広州、柳州)を立項するが、“勞動”は未収。

近世語辞典類では《金瓶梅词典》に積義“(1) 客套话。烦劳; 使劳累。(2) 劳累; 辛苦”, 《红楼梦语言词典》に積義“敬辞。感谢人为自己出力”とする。《例释》、《方言俗语》、《古方言》に未収。

《醒》では同義語“煩勞”も用いるが、“勞動”も用いる。その例。

晁夫人道: “前日爺出殯時既然沒來穿孝, 這小口越發不敢勞動。”(20.8b.1)

(晁夫人は「先日、夫の出棺の時に喪服を着なかったのだから、息子の場合は余計に煩わせられないわ。」と言った)

掌櫃的道: “你二位甚麼福分敢勞動老爺與你們煖酒哩。”(23.7a.7) (“煖酒” = “暖酒”)

(番頭は「あなた方お二人はどんな福がおりなのか。旦那様がわざわざあなた方お二人に酒の燗をして

下さったのですよ。」と言いました)

至于上門催討得來的, 十無一二, 未免要勞動汪相公大駕親征, 又漸漸的煩勞動汪相公文星坐守, 又扶至于興詞告狀, …。(35.4b.7)

(家を訪問して金を催促しても、それに出す者に至ってはめったにない。よって、どうしても汪相公自らの大遠征を煩わすことになる。また、徐々に汪相公自身が相手方の家で居座ることになる。更に、訴訟を起こすことになる。…)

《金瓶梅詞話》、《石頭記》、《兒女英雄傳》からの例。

西門慶道：“申二姐，你拿琵琶唱小詞兒罷。省的勞動了你。…”(《金瓶》61.17a.4)

(西門慶は「申二姐、お前は琵琶で小唄を歌ってくれ。そうすればお前も手間がかからないだろう。…」と言った)

賈珍笑道：“只是又勞動老二，我心不安。”(《石頭》64.16a.4)

(賈珍は笑って「お前には煩わせてばかりいて、私も心苦しい限りだ。」と言った)

褚大娘子道：“妹子，請坐罷。怎麼只是勞動起你來了。(《兒女》25.20a.2)

(褚夫人は「ねえ、お座りなさいな。あなたばかりに煩わせちゃうわね。」と言った)

-du

谷都 gūdu

積義：「〔動詞〕口をとがらせる」。現代共通語では一般に“把嘴撅起来；(嘴) 撅着；鼓起”。

“谷都”は一般に“咕嘟”[gūdu]と作る。《現漢》(積義“(嘴) 撅着；鼓起”)、《漢語》に“咕嘟”と作り一般語彙として、《古今》は方言語彙として収録。共通語の大枠基準を示す《拼音词汇》に収める“咕嘟”[gūdu]は積義をわざわざ“長時間煮”と注記し、用法が異なる。

方言辞典類では一般に“咕嘟”と作る。《漢方常》に(積義“(嘴) 撅着；鼓起”)で北方方言とし、《紅樓夢》、王統照《山雨》より挙例。《山東》(p.360)、《北京話》、《現代北京》にも収める。《吳》に未収。

《基本词汇集》(p.2613)の詞目で“噉嘴”項で“咕嘟”(谷都)を指す方言点は無い。代わりに、同音語“骨啣”を指す方言点は唐山、邯鄲、張家口、赤峰、佳木斯、白城、利津、諸城、商丘、漣水とする。また、儿化語“骨啣儿”を指す方言点は丹東、錦州である。近似音語“吃啣嘴”を指す方言点は臨河、呼和浩特である。

《漢方大》(p.3346)は“咕嘟”を積義“(嘴) 撅着；鼓起”で方言点を東北官話(東北)、北京官話(北京)、中原官話(河南省鄭州)とする。また、同音語“咕都”を中原官話(河南省鄭州)とする。同書(p.2773)に“谷都”は積義“指嘴噉着而臉帶怒容的樣子”の方言点を西南官話(雲南省)、吳語とし、李崧英《云南滇中道の謎語》、《九尾龟》第157回より挙例。

《現漢方大》(p.2209)に“咕嘟”(積義“象聲詞。液體沸騰水流湧出的聲音”)の方言点を西安とするが、積義が異なる。但し、“咕嘟着嘴”(積義“噉着嘴”)の方言点を牟平とする。なお、同書(p.1859)に“谷都”は未収。

近世語辞典類では《例釋》に“骨突(着嘴)”(積義“即噉嘴，不高兴的样子。骨突，鼓容”)で《聊齋俚曲集》より挙例。この按語に“今方言中说‘鼓都着嘴儿’”とする。《方言俗語》に“谷都”と作り《金瓶梅》より挙例。

《金瓶梅詞典》に“谷都”[gūdu](積義“(嘴) 撅起；鼓起”)、《紅樓夢語言詞典》に“咕嘟”(積義“不高兴地自言自语”)を収録。《古方言》に未収。

《醒》の例。

童奶奶合調羹沒顔落色的坐着, 寄姐在旁裏也谷都着嘴妳小京哥。(82.3b.4)

(童奥さんと調羹は元氣なく座っていましたが、寄姐はそばで口をとがらせ小京哥に乳をのませています)

《金瓶梅詞話》からの例。“谷都”と作る。

那秋菊把嘴谷都看了(《金瓶》78.22b.11) (“看了” = “着了”)

(かの秋菊は口をとがらせてぶつぶつ言っています)

《石頭記》、《兒女英雄傳》からの例。いずれも同音語“咕啣”と作る。

柳家的只好摔碗丟盤, 自己咕啣了一回, …。(《石頭》61.4a.10)

(柳のかみさんは仕方なく勢いよく碗や皿を放り出して、一人ぶつくさこぼし、…)

姑娘無法, 只得咕啣着嘴背過臉去, 解扣鬆裙, 在炕吞兒兒裡換上。(《兒女》27.20b.2)

(娘は仕方なくぶつぶつ言いながら顔をそむけ結び目を外し、オンドルの片隅で着替えました)

-dui

操兌 cāodui

積義: 「〔動詞〕工面する、措置を執る、手だてを講じる」。現代共通語では一般に“筹措; 操办”。

《現漢》、《古今》、《漢語》、《補》いずれにも未収。

方言辞典類では《山東》に軽声語“操兌”(積義“操办; 管理”)を収める。山東方言である。

《漢方常》、《北京方言》、《北京話》、《現代北京》、《河北方言》、《現漢方大》(p.5611)、《漢方大》に未収。

近世語辞典類では《老論》に収録。《例釋》、《古方言》、《方言俗語》、《金瓶梅詞話》、《石頭記》、《兒女英雄傳》に未収。

《醒》の例。

戴氏道: “看着孩子受罪的一般, 甚麼是吃得下的。我不吃這酒飯, 我流水家去看他老子, 別處操兌弄點子袄來, 且叫這孩子穿着再挨。”(79.8b.2)

(戴氏は「わが子を見ていますとお咎めを受けているようで。どうして喉が通りましょうか。お酒や料理は戴きません。さっさと帰って、子供の父親と会い、別の所で裕を工面して作り、子供に着せてからこちらのお家で耐えさせます!」と言いました)

-duo

攙掇 cuānduo

積義: 「①〔動詞〕唆す、人に気を向けさす。②〔名詞〕助け、手伝い」。現代共通語では一般に“①挑唆; 怂恿。②帮助; 帮忙”。

《現漢》に“攙掇”[cuānduo](積義“从旁鼓动人(做某事)”)。《古今》に積義“怂恿”、《漢語》に積義“猶言慫恿, 勸唆人有所舉動之意”で朱熹の文に見えるとする。いずれも一般語彙とする。《拼音词汇》に<口>記号を付して収録。

方言辞典類では《吳》に“攙掇”(積義“怂恿; 鼓动别人(做某事)”)で《警世通言》、《醒世恒言》より挙例。《嘉定县续志》“俗谓劝人有所举动曰攙掇”を引用する。

《漢方常》に“攙掇”の積義(1)“怂恿; 鼓动人(做某事)”を《黎里续志》: “怂恿人使为之曰攙掇”から引用。《醒世恒言》より挙例。《吳》、《北京話词语》に見えるとする。また、積義(2)“帮助”を《洛陽方言词汇》に見え

るとする。《山東》に同音語（近似音語）“擻叨”[ts‘uan₂₁tao]（積義“唆使；怂恿”）の方言点を陽谷とする。《現代北京》にも“擻掇”の積義を“怂恿；鼓動”とする。

《基本词汇集》に未収。

《汉方大》(p.7048)に積義(1)“帮助”の方言点を中原官話（河南省洛陽）、積義(2)“张罗；拾掇”の方言点を単なる官話とし、元・無名氏《桃花女》、清・孔尚任《桃花扇》より挙例。

《現漢方大》(p.6260)に積義“從旁鼓動；慫恿”の方言点を洛陽、西寧、烏魯木齊、太原、上海、蘇州とする。また、積義“幫助；幫忙”の方言点を万榮とする。

近世語辞典類では《方言俗語》に積義(1)“劝诱；怂恿”を《秋胡戏妻》、《水浒传》より挙例。按語に“今魯南方言仍有此語”する。積義(2)“催促；催送”を《竇娥冤》、《醒》第83回より挙例。

《金瓶梅词典》に積義“(1)怂恿；从旁鼓动。(2)操持；打点。(3)打杂；跑腿”を収録。《红楼梦语言词典》は積義“从旁怂恿”のみ。《百部小说》に積義“(1)怂恿；鼓动。(2)扶持；帮助”とする。《古方言》に未収。

《醒》では同義語“慫恿”、“挑唆”と共に“擻掇”も多く使用。積義①“挑唆；慫恿”「唆す、人に氣を向けさす」の例。

那新夫人郎氏…哭道：“…。他是我的个後娘，恨不得叫我死了，省了他的陪送，他如何肯不擻掇。”
(62.3b.4)

(その花嫁郎氏は…泣いて「…。その人は私の継母です。だから私に死んでほしいのです。そうすれば嫁入り道具を準備するのが省けるのです。それゆえ、どうして勧めないことがありますでしょうか。」と言った)

狄希陳不依，纏着待去。狄周媳婦又擻掇。(40.14a.10)

(狄希陳は従おうとせず、まとわりついて一緒に行こうとします。狄周のかみさんも勧めます)

三個說道：“也罷。只得你進去替我們擻掇一擻掇，更覺容易些。”(22.15a.9)

(三人は「まあ、よからうて。でもね、あんたも中へ入って我々の為にちょっとばかり勧めて欲しいんですよ。そうすればもっと簡単に行くんですが。」と言った)

《金瓶梅詞話》、《紅樓夢》、《兒女英雄傳》からの例。積義は「勧める、その氣にさせる、唆す」(なお、《石頭記》は下記例と同一箇所を削除)。

金蓮道：“知道。”打發月娘出來，連忙擻掇經濟出港，往前邊去了。(《金瓶》83.4b.5)

(金蓮は「わかりました。」と言って月娘を帰らせた。そして慌てて經濟を出して表の方へ行かせた)

鳳姐…道：“…。為什麼不當着老爺擻掇，叫你也作詩謎兒。…”(《戚序本》22.21a.1)

(鳳姐は…「…。どうしてお父上を唆して、あなたにも詩謎を作らせるようにしなかったのかねえ。…」と言った)

張金鳳…暗道：“等我索興給他個連三緊板，這件事可就擻掇成了。”(《兒女》26.24a.5)

(張金鳳は…密かに「私が思いきって続けさまにもう後一押しすれば、ことは成る」と思いました)

積義②“幫助；幫忙”は《醒》において同義語“幫助”を多く用い、時に“幫扶”、“擻掇”を用いる。“擻掇”の例。

狄希陳道：“說不盡。得了張大哥的玉成，李哥的擻掇，完了這件事，可是感激不盡。(66.1b.7)

(狄希陳は「全く言葉では言い尽くせないよ。張君や李君の助けによって、今回のことは全うしたんだ。本当に感謝するよ。」と言った)

喝掇 hēduo

积義:「〔動詞〕叱責する、叱る、大声で人を責める」。現代共通語では一般に“训斥; 吆喝”。

《現漢》、《古今》、《漢語》、《補》いずれにも未収。《拼音词汇》に未収。

方言辞典類では《山东》に軽声語の同音語(近似音語)“呵打”(积義“严厉训斥”)の省内方言点を萊陽とする。

《漢方常》、《北京話》、《現代北京》、《現漢方大》(p.4336)に“喝掇”は未収。

《漢方大》(p.6069)に“喝掇”(积義“训斥; 吆喝”)の方言点を冀魯官話(山東省)で《醒》第96回より挙例。また、“喝掇”(积義“申斥”)の方言点を北京官話(北京)とし、元曲《后庭花》より挙例。

近世語辞典類では《例釋》(p.192)に积義“训斥; 吆喝”でその按語に“今方言中说‘喝叭’。‘喝’音豁”とし、《醒》第96回より挙例。《方言俗語》、《古方言》《金瓶梅詞話》、《石頭記》、《兒女英雄傳》に未収。

《醒》では同義語“吆喝”を多く用いるが、“喝掇”も用いる。その例。

兩邊的皂隸一頓喝掇了出去。(74.10a.9)

(両側の下級役人は、ひとしきり怒鳴りつけ出て行きました)

一个又是擗頭，兩句喝掇，只好伍着眼，別處流淚罷了。(95.7b.1)

(もう一人はばか者だから、少し叱りつけると、仕方なく目を覆い、別の所で涙を流すだけだわさ)

我只待喝掇奪下他的，我惱那伍濃昏君沒點剛性兒，賭氣的教他拿了去。(96.11a.1)

(私は叱りつけ、あいつらから奪い返そうとしたわ。でも、私は軟弱でばか君主が少しの気骨も無いので怒っているのよ。意地で奴らにくれてやったわ)

拿掇 náduo

积義:「〔動詞〕作る、持つ」。現代共通語では一般に“做; 拿”。

《現漢》、《古今》、《漢語》、《補》に未収。《拼音词汇》に未収。

方言辞典類では《漢方常》、《山东》、《現代北京》、《河北方言》、《現漢方大》に未収。

《漢方大》(p.4973)に“拿掇”(积義“做; 拿”)の方言点を膠遼官話(山東省)とし、《醒》第49回、55回より挙例。

近世語辞典類では《例釋》に积義“做; 拿”で《醒》第49回、55回より挙例。その按語に“今方言中说‘拿打’”とする。なお、《金瓶梅詞話》に“拿掇”(积義“端出; 拿出(給人看)”)を収録。

《百部小説》、《方言俗語》、《古方言》、《石頭記》、《兒女英雄傳》に未収。

《醒》の例。

老吳婆子說：“…。我還有話稟奶奶：除的家還許我來看看媳婦子，漿衣裳，納鞋底，差不多的小衣小裳，我都拿掇的出去。(49.13b.10)

(老吳のかみさんは「…。私は更に奥様をお願いを申し上げたいのです。この子を見に来て良いという許しを戴く他に、着物の洗い張り、靴底の張り替え、赤子のほとんどの着物など私が作りたいのです。」と言いました)

童奶奶道：“…。好客的人常好留人喫飯，就是差不多兩三席酒，都將就拿掇的出來了，省子叫廚子，僭早晚那樣方便哩。(55.2a.2) (“省子” = “省了”)

(童奥さんは「…。お客好きの人ですし、いつも引き留めて料理を出すなら、たとえ大体二、三席の宴で

も何とか作ってくれます。ですから、料理人を呼ぶ手間が省けますし、どのみち、とても便利ですよ。」と
言った)

《金瓶梅詞話》からの例。

月娘道：“我就聽不上你恁說嘴。自你家的好拿掇的出來見的人。(《金瓶》75.15b.1)

(月娘は「私はあなたがそんなへらず口をたたくの^を聞いちゃおれませんわ。自分の家の^のが良いですと
人前に挨拶に出られるのです。」と^言った)

拾掇 shíduo

釈義：「〔動詞〕片づける、整理する」。現代共通語では一般に“收拾；整理”。

《現漢》に釈義“整理；归拢”で一般語彙。《古今》、《漢語》にも一般語彙として収録。《拼音词汇》
にも収める。

方言辞典類では《漢方常》に釈義“(1) 收拾。(2) 修理”で北方方言とし、各々《金瓶梅》、《庄农日用杂
字》より挙例。《北京话》、《现代北京》、《关中方言》、《南阳方言》にも収録。《河北方言》の詞目“收拾”(=
“整理”)の項で、全省通行とする。《山东》は“拾掇”に“(1) 修理。(2) 责备。(3) 惩罚。(4) 收割”の4種
類の意義を収めるが“收拾；整理”の意義を立項しない。《吳》に未収。

《基本词汇集》(p.4182)の詞目“收拾”項で“拾掇”を指す方言点は北方を中心に多く分布する。即ち、北
京、天津、承德、保定、滄州、邯鄲、平山、陽原、大同、忻州、離石、太原、臨汾、長治、臨河、呼和浩特、赤峰、
二連浩特、黑河、齊齊哈爾、哈爾濱、佳木斯、白城、長春、通化、瀋陽、丹東、錦州、煙台、青島、利津、諸城、
濟南、濟寧、商丘、林縣、原陽、鄭州、靈寶、西安、寶雞、綏德、銀川、天水、蘭州、敦煌、西寧、哈密、烏魯木
齊、襄樊、阜陽、合肥、徐州、漣水とする。

“拾掇”が北方方言である所以は、《漢方詞》の詞目“收拾”(=“整理”)項で“拾掇”を指す方言点を見れ
ば明らかである。即ち、官話の北京、濟南、西安、太原、合肥のみであって、南方緒方言には見られない。

《漢方大》(p.4014)に釈義“整理；收拾”は未収。方言と認めないゆえである。釈義“惩治；弄死”で方言点
を晋語(陝西省綏德)とする。これは用法が異なる。ただ、同書に同音語“拾妥”(釈義“整理；收拾”)の方言
点を中原官話(陝西省中部)、晋語(山西省)とする。更に、同音語“拾夺”(釈義“收拾；整理”)の方言点を
晋語(山西省。陝西省北部)、中原官話(山西省洪洞)とする。そして、“拾綴”[shízhui](釈義“收拾；整理”)の
方言点を中原官話(河南省南陽)とする。この例を《醒》第32回より挙例。これが我々の挙げる下記第2
例(第33回)である。用字も手偏と糸偏の差がある。

《現漢方大》(p.2527)に“拾掇”(釈義“收拾；整理”)の方言点を濟南、西寧、牟平、洛陽、西安、太原、
銀川、烏魯木齊、万榮、忻州とする。

一方、《汉语委婉语词典》によれば「処刑する、処罰する」の意味での「片づける」として“拾掇”が婉曲表現
として用いられる。

近世語辞典類では《例釋》に釈義(1)“收拾”で《金瓶梅詞話》より挙例。また、釈義(2)“修理”で《庄农
日用杂字》より挙例。《金瓶梅词典》に釈義“收拾；整理”とする。《方言俗语》、《古方言》に未収。

《醒》では同義語“收拾”と共に多く用いられる。“拾掇”の例。黄肅秋注に釈義“收拾”とする。

你待說休俺妹子，你寫下休書，我到家拾掇坐屋，接俺妹子家去，這有什麼難處的事。(8.15a.5) (“坐”
=“座”)

(お前がワシの妹と離縁するなら離縁状を書きなさい。ワシは家へ帰って部屋を整理し、妹を引き取って家へ戻ります。こんなこと、何の難しいことがあるのかね?)

既是請先生, 還得旋盖書房哩, 就仗頼沈把總你來拾掇拾掇罷。(33.10a.2)

(先生を招くからには、もう1度新しく私塾を建てねばなりません。そうなら沈隊長あんたに来て整理して貰わねばなりません)

《金瓶梅詞話》、《兒女英雄傳》からの例。

金蓮道: “你別要管他丟着罷。亦發等他每來拾掇…” (《金瓶》23.9b.6)

(金蓮は「あんたはあいつらに構わないで放っておきなさいよ。あいつらが来てから片付けさせます。…」と言った)

褚大娘子…說道: “…。我費了這麼幾天的事, 纔給你老人家拾掇出這個地方兒來。…” (《兒女》39.25b.4)

(褚のかみさんは…「…。私は何日間か費やして旦那様の為にこの場所を片付けたのですよ。…。」と言いました)

折墮 zhéduo (折毒 [zhédu])

釈義: 「〔動詞〕痛めつける、虐げる、いじめる」。現代共通語では一般に“折磨”。

《現漢》、《古今》、《漢語》、《補》に“折墮”、“折毒”は未収。《拼音词汇》にも未収。但し、同義語“折腾” [zhēteng] (釈義“折磨”) を《現漢》、《拼音词汇》 (<口>符合を付す) に収録。

方言辞典類では《漢方常》、《山东》、《現代北京》に“折墮”、“折毒”は未収。但し、《山东》に同義語“折倒”、“折登”の省内方言点を桓台、青州、平邑、陽谷とする。同様に、に《北京方言》に同義語“折登”、“折腾”を、《現代北京》に“折蹬”“折腾”を、《徐州方言志》に“折搗”を収録。

《漢方大》(p.2552)に“折墮”(釈義“折磨”)の方言点を冀魯官話とし、《醒》第52回より挙例。

《現漢方大》(p.1645)に“折墮”(釈義“造孽”)を指す方言点を南寧平話、広州とする。“折毒”(p.1644)は未収。

近世語辞典類では《例釋》に同音語“折掇”(釈義“折磨”)で《聊齋俚曲集》より挙例。“折墮”を《醒》第52回より挙例。《古方言》に同音語“折墮”、“折毒”、“折掇”、“折倒(折到)”を同様の釈義で立項する。最後の“折倒(折到)”は《山东》に見える。

《方言俗語》、《金瓶梅詞話》、《石頭記》、《兒女英雄傳》に未収。

《醒》では同義語“折挫”、“折磨”と共に“折墮”もよく用いられる。その例。

姑子說: “這敢是你那一輩子與人家做妾, 整夜的伺候那大老婆, 站傷了。因你這般折墮, 你從無暴怨之言, …。”(40.8b.7)

(尼僧は「こちらは恐らく前世で妾として過ごされ、一晚中本妻様に傍らで立ってお仕えし、足を傷めてしまわれた。そのように虐げられても恨みごとは全くおっしゃいませんでした。…。」と申します)

狄員外道: “…。有這們混帳孩子。死心蹋地的受他折墮哩。”(52.5a.10)

(狄員外は「…。バカな子だよ!じっとして虐げられているなんて!」と申します)

同音語“折毒”の例。

程大姐自到周龍舉家, 倚嬌作勢, 折毒孩子, 打罵丫頭, 無惡不作。(73.1a.6)

(程大姐は周龍皋の家へ来てからは、美しさを恃み、勢いを成し、先妻の子を虐待し、女中を殴るわ、罵るわで、悪業の限りを尽くした)